

淀川河川事務所の広報の取り組みについて

松田 淳吾

近畿地方整備局 大和川河川事務所 用地課 (〒583-0001大阪府藤井寺市川北3丁目8番33号)

淀川河川事務所では、淀川に関する様々な情報発信を行う出前講座・現地案内を毎年約150件程度実施している。平成26年度に実施した出前講座・現地案内の内訳は、出前講座10件・現地案内140件(淀川資料館100件、新旧毛馬施設見学32件、魅せる!現場6件、ワンド1件、三栖閘門1件)であり、全体の約65%が淀川資料館内で行われている。淀川資料館では、明治以降の我が国の近代的河川技術の発達の歴史を記録した貴重な古図面・古写真・古文献等を約5,000点保管しており、それらの資料を有効に活用しながら来館者対応を行っている。

キーワード 広報 情報発信 地域連携

1. 淀川資料館の概要と開館経緯

淀川資料館

開館年月日: 1977(昭和52)年3月12日

施設管理者: 近畿地方整備局淀川河川事務所

施設の所在: 大阪府枚方市新町2丁目2番13号

建物の面積: 約350㎡(資料の閲覧に利用している面積約250㎡)

保存資料数: 約5,000点(古図面・古写真・古文献等)

問い合わせ・資料閲覧件数: 約600件/年

1874(明治7)年に明治政府による「淀川修築工事」(低水工事)の着手から100年目にあたる1974(昭和49)年に、淀川改修着手百周年の記念事業の一つとして「淀川資料館の建設」が企画され、それを契機として1977(昭和52)年に淀川資料館は開館した。資料館の開館目的については、当時の所内報によると副所長が以下のとおり述べている。

「開館の目的とするところは、もとより職員の業務上の参考資料として、また河川工学、土木技術の自己研鑽の教材として活用するものであるが、更に地域住民の閲覧にも供して、淀川の恵みと自然の恐ろしさを認識してもらうことにより、淀川河川改修事業の重要性に深い理解を得て、住民の淀川を守り育てる意識の涵養に寄与したいと願うものである」

開館目的の第一は、「職員の技術力向上を目的とし、職員の業務上の参考資料として、河川工学、土木技術の自己研鑽の教材のため」という崇高な目的を掲げている。第二の「淀川河川改修事業の重要性に深い理解を得て、住民の淀川を守り育てる意識の涵養に寄与したい」については、実はある時代背景が大きな影響を与えている。

それは、淀川資料館開館前後の河川事業を取り巻く社会環境の大きな変化である。

淀川水系工事实施基本計画が策定・改訂された昭和40年代前半から昭和50年代にかけて、淀川水系では画期的な事業が次々と実施(琵琶湖総合開発事業、国営淀川河川公園事業、特定砂利採取制度の導入、淀川大堰の新築等)されていった。ところが、国の天然記念物イタセンパラをはじめとする生物の保護、琵琶湖総合開発計画工事差止訴訟、文化財保護と開発の対立等さまざまな住民運動が熾烈をきわめ、このような社会環境の変化が河川事業推進の大きな問題となっていた。こういった社会情勢のもとで河川事業を推進するためには、事業の必要性について国民の理解と協力を得るよりほかはなく、ここで淀川資料館設置の意義についての認識が高まり、開館するに至った。



淀川資料館全景

淀川資料館は、1977(昭和52)年4月1日から現在に至るまで無料で公開されている。淀川資料館開館時の来館対象者は「義務教育を終了した人で、河川に関心の深い

人」としていたが、実際は小学生と義務教育を終了した人と二極化されており、現在もこの傾向が続いている。

淀川資料館の来館者数は

- (a)1977(昭和52)～1997(平成9)年度…約2,500人／年
 - (b)1998(平成10)～2001(平成13)年度…約6,900人／年
 - (c)2002(平成14)～2010(平成22)年度…約12,300人／年
 - (d)2011(平成23)～2013(平成25)年度…約6,600人／年
- と大きく4つのグループにわかれている。

(b)(c)グループの来館者数増加の要因は、1997(平成9)年に淀川資料館に隣接した淀川河川公園枚方地区の開園、平成10年の資料館展示リニューアル、平成13年のバリアフリー工事等による施設の強化によることが考えられる。

一方で、(d)グループの来館者数が(c)グループのほぼ半分に減少しているのは、広報見直しに伴う淀川資料館の無人運営化が原因と考えられる。

2. 淀川資料館の保存資料

1874(明治7)年に明治政府の手による河川改修工事が開始され、103年後に淀川資料館は開館した。この間、ヨハネス・デ・レイケらオランダ人技師の指導の下、淀川の舟運の航路確保を目的とした淀川修築工事、沖野忠雄を中心とした日本人だけの手による淀川改良工事など、日本の土木技術や河川行政に大きな影響を与えた数多くの優れた治水工事が淀川で行われてきた。こうした明治以降の淀川の改修工事に関する資料は、古図面・古写真・古文献等として淀川資料館に約5,000点保管されている。これらは単に淀川の歴史を綴るのに重要というだけでなく、我が国の近代的河川技術の発達の歴史的な資料として非常に貴重であり、土木学会あるいは大学等の研究者から非常に高い評価を受けている。また、一部の研究者からは「億単位の価値のある資料」あるいは「金に換算することができないくらいの価値のある資料」と言われている。

そのような貴重な資料が淀川資料館に大量に保管されているのには理由があり、その理由を探るためには、近畿地方整備局誕生のルーツをたどる必要がある。

今から約140年前の1874(明治7)年に大阪市西区土佐堀の旧松江藩大阪邸に内務省大阪出張土木寮が置かれた。このとき「淀川改築事務章程」が定められ、「淀川修築ノ為メ大阪府下ニ出張所ヲ設ケ修築ニ関スル一切ノ事務ヲ管理ス」とあり、近畿地方整備局の元である大阪出張土木寮は淀川の改修のために生まれた。現在、近畿地方整備局は、河川以外に道路、港湾・空港、官庁営繕とさまざまな土木行政を請け負っているが、誕生のきっかけが「淀川の改修」というのは意外な一面を感じられる。その後、内務省淀川出張土木局→内務省第四区土木監督署→内務省第五区土木監督署→内務省土木局大阪土木出張所→内務省近畿土木出張所→総理府建設院近畿地方建設局→建設省近畿地方建設局→国土交通省近畿地方整備局と変遷していくが、庁舎の移転は1958(昭和33)年に西

区土佐堀から現在の中央区大手前の一度しかない。また、この間は「淀川改良工事」「淀川改修増補工事」「淀川修補工事」等淀川の改修の工事も中断することなく続いていた。明治以降の淀川の改修資料が残っているのは、「移転や業務の中断などによる資料の散逸がなかったこと」が第一の理由、「太平洋戦争末期の大阪大空襲の際、庁舎は直撃弾を受けて全壊したものの、焼夷弾でなかったため相当数の書類が助かったこと」が第二の理由、「空襲に備えてあらかじめ資料の疎開をおこなっていたこと」が第三の理由、これらの理由が資料が相当数残存した要因であるといわれている。淀川資料館に昔の資料が数多く保管されているため、一部の人からは「淀川資料館には、明治以降の淀川に関する資料がすべて残っている」と誤解されているが、先の大戦の戦禍をくぐり抜けてきた過程の中で、残念ながら紛失・消失した資料も数多くあり、すべてが保存されているわけではない。

以下、淀川資料館が保管する資料の一部を、公益社団法人土木学会創立100周年記念として出版された「土木コレクション2014 HANDS+EYES」(平成26年6月4日出版)に掲載された図面から少し紹介したいと思う。掲載にあたり、2013(平成25)年11月頃から土木学会による事前審査を受け、最終的に全国150件中、淀川資料館保有の古図面は2件(「淀川河川改修」「毛馬開門・洗堰・長柄運河」)、図面数にして14点掲載された。

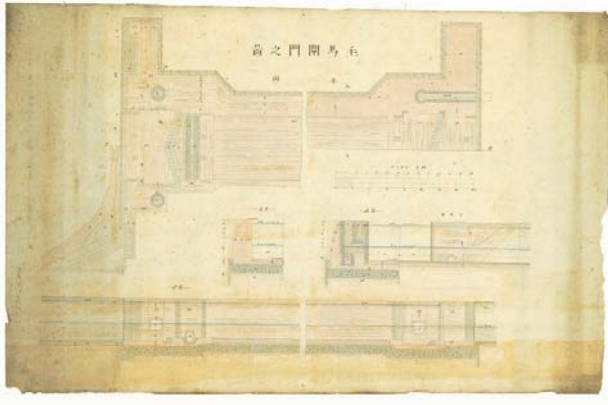


淀川(全川)平面図

明治中期作成(推定)。淀川改良工事における河川の付け替えや引堤箇所等が大阪湾～琵琶湖までの各所に記載



淀川改修増補工事における三川合流地点計画平面図
桂川・宇治川・木津川の三川合流が美しく描かれている



毛馬閘門の立面図 部分断面図

この図面に描かれている旧毛馬閘門は、2008(平成20)年に国の重要文化財の指定を受けている



二川合流(淀川・木津川)地点における三角測量

明治初期にオランダ人技師の指導により描かれた測量図面



土木学会員による図面選定風景

淀川資料館で保存する資料約5,000件のうち、約1,000件が古図面の保存件数となっている。保存図面は淀川以外に、大阪港築港計画関連図面、淀川改良工事大津市南郷地区用地買収図面、現在大阪府が管理している神崎川の明治期付替工事図面、さらには江戸時代の天保期の図面等とバラエティーに富んでおり、すべてを把握するのが困難なボリュームである。資料館ではこれらの図面の閲覧対応や淀川・桂川・宇治川・木津川に関する問い合わせ対応を年間約600件こなしている。保存資料は随時電子化作業を進めており、閲覧希望の多い古図面の電子化は概ね完了している。多くはパソコン上で閲覧してもらう形をとるが、原本の閲覧ニーズも高く、閲覧対応に時間を要しているのが現状である。

3. 地域と連携した初の合同企画展

2014(平成26)年4月1日に明治18年洪水碑が枚方市の登録文化財に登録されたことに伴い、これを記念して枚方市立枚方宿鍵屋資料館(以下、「鍵屋資料館」とする)と両施設初の合同企画展を実施することになった。



明治18年洪水碑(淀川河川事務所枚方出張所敷地内)

前年度から、両施設で何度か打合せを行い、合同企画展実施の可能性について模索をしていたが、洪水碑の登録文化財化で一気にその動きが加速していくことになる。

「明治18年の洪水」とは淀川史上最大級の被害をもたらした洪水の一つである。枚方地点(当時の三矢村・伊加賀村)で淀川左岸堤防が決壊し、北河内・中河内一帯が水没、大阪市内も上町台地を残して多くが浸水した大水害である。この洪水をきっかけに、内務省第四区土木監督署長沖野忠雄技師を中心に、新淀川の開削、毛馬洗堰・瀬田川洗堰の建設、宇治川の付け替え等、総事業費約1,000万円をかけ淀川の大改良が行われた。これらの話は、淀川を管理する淀川河川事務所の職員は知っていて当然のように思えるが、淀川沿いの小学校の出前講座(淀川沿いの小学校では小学4年の社会科で淀川の歴史を学習する)の講師として小学校へ出向く際、はじめてその歴史を知る職員も少なくない。従って、淀川河川事務所枚方出張所構内に枚方市の占用物件として設置されている「明治18年洪水碑」が、大洪水の翌年の9月に設置されたこと、新・旧枚方大橋の淀川架橋の過程で当初の設置から数えて、5回も移設され現在の地に落ち着いたこと、洪水碑のある淀川河川事務所枚方出張所の場所こそ、明治18年淀川洪水枚方伊加賀切れ決壊箇所であること、明治18年洪水では大阪市都島区網島でわざと切れをして排水した話が有名だが、デ・レイケの報告書ではわざと切れの水勢が強く、下流で余計に被害が拡大したと報告していること、鍵屋資料館前の細い生活道路としか思えない旧京街道が、明治国道二號線に指定されていたこと、といった内容はほとんど知られていない事実である。このような過去の歴史として埋もれていった事実も、淀川資料館で保存する古図面・古文獻等をゆっくりと読み解いていくと解明することができる。

今回、合同企画展で連携した鍵屋資料館は、淀川資料

館から徒歩10分程のところにある。淀川堤防と旧京街道に挟まれるようなかたちで立地しており、2001(平成13)年に開館した。



市立枚方宿鍵屋資料館

比較的、最近オープンした資料館だが、建物自体は江戸時代から続くもので、かつての淀川三十石船の船待ち宿「鍵屋」が元となっている。鍵屋資料館の別棟1階では枚方宿や淀川舟運に関する資料が展示されている。

合同企画展示は下記のとおり実施された。

市立枚方宿鍵屋資料館・淀川資料館合同企画展

「明治18年の淀川洪水(淀川資料館会場)」

開催期間：平成26年10月8日(水)～11月24日(水)

来館者数：1,779人(前年同期比35%増)

展示物：パネル、古図面・古写真、平成25年9月台風18号災害写真展示、ハザードマップ、浸水想定区域図等



今回実施した合同企画展は、国と地方自治体が管理する両資料館が連携し、「明治18年の淀川洪水」について、枚方ローカルの視点で鍵屋資料館が、枚方を含む淀川全体の視点で淀川資料館が役割分担し、同一のテーマでそれぞれの施設の特徴を生かした展示展となった。

淀川資料館会場では、主に淀川改良工事関連資料を中心に展示物を用意し、パネル以外では下記のとおり淀川

を全体的にとらえた古図面・古文献を展示した。

- ・淀川改良工事 内務省土木局(古文献)
- ・淀川左岸水害豫防組合誌(古文献)
- ・淀川本支派川平面図(古図面)
- ・淀川改良大阪市西成郡之内買収図(古図面)
- ・淀川流域水害図(古図面)
- ・明治大正年間洪水破堤箇所図(古図面)
- ・毛馬第一閘門(古図面)
- ・毛馬洗堰(古図面)
- ・淀川改良桂川筋紀伊・久世・乙訓・綴喜四郡買収図(古図面)

また、鍵屋資料館には、下記3点の資料を貸し出し、枚方地点を中心にした展示もおこなっている。

- ・淀川高水防禦工事計画意見書(古文献)
- ・淀川改良三島・北河内両郡買収地図(古図面)
- ・樋門及び水路設置平面図(古図面)



淀川改良三島・北河内両郡買収地図

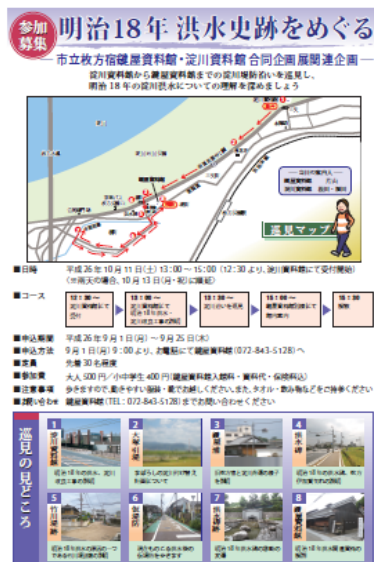
展示展の準備は、平成26年6月頃から行い、鍵屋資料館学芸員とチラシのデザインや展示物の調整を何度も行っている。双方で収集した資料について、限られた時間の中で勉強会を行い、同じレベルで理解していくのが苦労した点であった。また、工夫した点は、両施設受付で来館者に「合同企画展であり、両施設を見学するとお理解が深まる」旨の案内を積極的に行い、両資料館間を行き来する人の流れをつくるよう心掛けたことである。京阪枚方公園駅と枚方市駅の間に淀川資料館・鍵屋資料館があり、会期中2駅を結ぶ旧京街道では、合同企画展のビラをもって行き来する人の姿を目にすることも多く、周遊コースが形成されているようであった。



展示展の来館風景(淀川資料館)

4. 保存資料を活用した巡見（史跡巡り）

上記「3. 地域と連携した初の合同企画展」で紹介した合同企画展の関連企画として、「明治18年洪水史跡をめぐる」と題した巡見（史跡巡り）を2014(平成26)年10月11日（土）に実施している。



静的な合同企画展示の内容を動的な巡見で補い、さらなる「明治18年の淀川洪水」についての理解を深めようという趣旨で計画をおこなった。淀川資料館をスタートし、淀川河川公園（枚方地区）→明治18年洪水碑→枚方伊加賀切れ堤防決壊跡→仮堤防跡→鍵屋資料館の約2時間30分の巡見コースを設定している。

徒歩圏内に明治18年洪水史跡が点在しており、今までなぜこのような史跡巡りを実施したことがなかったのか？と逆に不思議としか思えないほど洪水史跡が適度に集まった理想的なコースである。洪水史跡巡りにどれほどの参加者申し込みがあるか不安を感じながら、枚方市の広報誌で募集をかけたが、受付開始から数日で定員枠を超過し、受付終了する状態であった。

巡見のための各史跡の事前調査も、鍵屋資料館学芸員と2014(平成26)年7月頃から調査を開始し、下見も何度もおこなっている。淀川資料館で保存している資料をじっくりと調査をする中で、我々国土交通省職員の偉大なる先輩にあたる沖野忠雄技師は、淀川改良工事の枚方地区では当初対岸の高槻側へ川替えを計画していたが、淀川舟運で繁栄した枚方の町の衰退を危惧し、高槻大塚側への引堤工事に変更をしたこと、江戸時代遊びの町として栄えた枚方宿内に散在していた遊郭が、明治18年の洪水決壊箇所の仮堤防跡地に集団移転させられ枚方桜新地を形成したこと、戦後法律の制定により桜新地は姿を消していくが、その中の屋号の一つが、現在誰もが知る企業に由来していること等、調査を行う過程で今まで聞いたことのなかった歴史の真実に出くわすことが多く、非常に興味深く調査作業を進めていった。

なお、リハーサルをかねて、枚方市教育委員会向けに2014(平成26)年9月にプレ巡検を行い本番に備えている。



明治18年淀川洪水伊加賀切れ跡（左）、仮堤防跡（右）

巡見当日は穏やかな天気恵まれ、事前調査で知った各洪水史跡の歴史を解説しつつ、淀川河川公園（枚方地区）では2013(平成25)年9月の台風18号の出水状況の紹介も行った。参加者からの質問も多く、非常に好評であった。特に、淀川資料館で保管する古図面・古文献等をフル活用した配布資料は参加者からの評価が高く、「貴重な淀川改修資料を紛失・散逸することなく保存・管理し、広く一般の方に閲覧・活用していただく」という淀川資料館資料館の使命を果たせたと自負している。



当日の巡見（史跡巡り）風景

巡見が好評であったため、枚方宿の説明内容もいれたリニューアル版を淀川資料館の団体説明として4回ほど追加実施している。いずれも枚方宿の歴史や淀川と枚方の関わりについてよく理解できたと好評であった。



「歴史街道協議会」向け団体説明風景

5. 取り組みの成果と今後の展望

今回の合同企画展の取り組みは、単に今から約130年前に大惨事となった淀川洪水について説明するだけではなく、近年のゲリラ豪雨や大型台風等の自然災害に備えるために、日頃から水害について意識してもらうきっかけづくりを意図している。「明治18年洪水碑」背面の前半から中頃にかけては洪水被害・復旧工事についての内容が刻まれているが、後半は中国の春秋戦国時代の鄭に仕えた政治家子産の言葉を引用しながら以下のように締めくくっている。

「火は烈しく水は弱い。烈しければ民衆は進んでこれを畏れて警戒する。なので、火の害で死者が出ることは少ない。弱ければこれに慣れてしまっ、侮るために水の害で死ぬ者が多いのである。～中略～ 火の性質は畏れるものである。畏れるものは自分の身を幸いする。水の性質は侮ってしまう。侮ってしまうものは人間に危害を加える。～中略～ 永久にこのすばらしい言葉を碑文に刻み、古人の言葉を後世に伝える。」

企画展展示ブースや巡見時の説明資料として、この明治18年洪水碑背面に刻まれた文章の現代語訳を紹介したが、来館者や巡見参加者は妙に納得するような顔つきで見ていたのが印象的であった。2013(平成25)年9月の台風18号で約30年ぶりに淀川がかなり高水位に見舞われたことを思い出しながら見ていたのかもしれない。



平成25年9月台風18号出水状況（枚方）

淀川資料館では、平成25年9月の台風18号出水写真の展示やハザードマップの展示もしていたが、非常に来館者の関心も高く質問も多かった。防災意識を高める意図は、ある程度企画展来館者に伝わったものと考えられる。

合同企画展の来館者数は、淀川資料館会場では前年同月比35%増となったが、鍵屋資料館は残念ながら減となっている。鍵屋資料館の来館者減少の大きな要因は、毎年春秋に実施される大阪水上バスによる淀川舟運（天満橋八軒家浜～枚方船着場）が、秋の便は出水による枚方大橋下流付近の堆砂の影響で部分運休となり、全便枚方船着場を発着できなかったことである。もともと、少しでも多くの方に企画展の見学をしていただくため、開催期

間は舟運の運行日にあわせており、部分運休は両施設の集客に大きな影響を与えた。特に、鍵屋資料館では乗船客が鍵屋資料館大広間で食事をするプランが組み込まれており、1,000人以上キャンセルとなった。その落ち込みが合同企画展の来館者数でカバーできなかったという。淀川資料館は枚方船着場から離れており、もともと乗船客すべてが淀川資料館に来館することがないため、鍵屋資料館ほどは大きな影響はなかったが、そのような状況下で、前年同期比35%増はかなりの健闘だったと思う。

2014(平成26)年度に淀川資料館では10回企画展を実施してきたが、鍵屋資料館との合同展示以外で他機関と連携した企画展は4回ある。これまで、淀川資料館は枚方市に立地していることから下流向けに情報発信することが多く、来館者も9割が枚方市民及び枚方市民以外の大阪府民となっていた。2014(平成26)年度は「淀川下流の人に上流のこと知ってもらおう」という新しい試みとして、独立行政法人水資源機構関西支社と連携して、平成26年8月30日～9月28日に「淀川の源流展」、平成26年12月10日～12月28日に「琵琶湖開発事業と文化財展」を開催している。また、平成27年2月21日～3月22日まで開催した特別展示「宇治川の流れ ～天ヶ瀬ダム供用開始50周年記念～」では、近畿地方整備局淀川ダム統合管理事務所の協力のもと、天ヶ瀬ダム建設時の写真や建設記録映画「天ヶ瀬ダム」の上映を展示期間中に毎日行った。来館者のアンケートを回収してみると、「当たり前のことだが、上流と下流がつながっていることを意識させられた」「平成25年の9月台風18号は、上流のダムや瀬田川洗堰のおかげで下流のわれわれの町が助かったというのがわかった」というような感想も見られ、「淀川下流の人に上流のことを知ってもらおう」という当方の意図もしっかりと伝わっている感触が得られた。こういった取り組みの結果、平成23年度からの淀川資料館無人化運営後減少が続いた来館者数ははじめて増加に転じ、平成26年度は8,217人と前年度比約30%増となった。今後も地域や他機関と連携し、地域住民の方々に淀川について様々な情報発信する施設であることを願っている。



なお、本稿は従前の所属である近畿地方整備局淀川河川事務所調査課の所掌内容である。